
わたしとボクのぬくもりの距離。

霜月美由梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしとボクのぬくもりの距離。

【Nコード】

N8566Y

【作者名】

霜月美由梨

【あらすじ】

機織の職の端女である少女が売られ、そして買われた家での物語。

壹、

わたしには、名前がない。

物心ついたときにはちゃんと名前があつてそれと呼んでくれるお父さん、お母さんがいたけれど、それもわたしの幼いときに殺されてしまった。

それ以降わたしは、奴隷として朝な夕な機を織る仕事についていた。そんなある日だった。

「おい」

わたしを呼ぶときはいつもこんな言葉だった。振り向くといきなり腕をつかまれて引きずられて小屋の外に連れ出された。なにかしてしまつただろうか。そう思いながら周りをみると、きらびやかな衣を着た、いかにも身分の高そうな男達が私たちを囲っていた。

「こんなので良いのですか？」

わたしを使っていた男は下心のある目で男達を下から見上げて首をかしげる。わたしだけ、置いてきぼりだ。

「ああ。この女だ。こい」

そういつて男の一人はわたしの腕をとって強く引つ張った。いつものことだ。わたしは要らなくなったのだ。

荷物を入れるだけの粗末な馬車に入れられてわたしはそう膝を抱えた。

がたがたと荷馬車は進んでいく。今度の働く場所はどこだろうか。男達の身なりからして、遊郭ではないことは確かだ。甘い香のにおいもしなければ、怪しい雰囲気もなかった。いうならば、武官のような、高潔で近寄りがたい雰囲気があった。

「おい」

また、わたしを呼ぶ声。気がつけば馬車は止まつていて扉を開けられていた。ボロ布をまとつただけのわたしは、ふらふらと馬車から降りて目の前に広がった大きな屋敷に息を吞んでいた。

「あ……」

「こちらに」

綺麗な衣をまとった女の人がわたしを誘導する。首をかしげながらその人についていく。わたしはどこかの家を買われたのだ。

「長旅ご苦労様」

そんなことをいつてくれる女の人を不思議に思いながらわたしはあいまいに微笑んだ。

わたしは言葉をしゃべれない。声を失ってしまったているのだ。

「声が出ないの？」

こくりとうなずく。かすれた、さつきみたいな声は出るのだが、言葉はまるきりでなくなってしまうている。それはおそらく幼少時の体験のせいだろう。

「いつていることはわかるのよね？」

優しい、いうならばお母さんみたいな声音で女の方は、わたしのお姉ちゃんぐらいの年の人はいった。

わたしはまたうなずく。まともにご飯を食べられていない足には、この屋敷のやわらかい土はきつい。

「大丈夫？」

うなずく。足をとられそうだが、何とか歩けている。だが、すぐに足をとられてしまった。

「おっと」

すぐ上から優しい男の声が聞こえた。そしてふわりとわたしを包み込むぬくもり。こけたわたしを受け止めてくれたのだ。

「ああ。蓮様^{リエン}」

「この子は？」

「私どもの新しい……」

「この子、あいつにukれないかな？」

「あいつとは、まさか、紅様^{ホン}に？」

驚いた声を上げた女の人にわたしは首をかしげ、そして、優しい香の香りのする衣をつかんで自分で立った。

「ああ、ごめんね。……ああ。だめか？」

「だめって、私どもはそれでも良いですが、でも……」

「この子ならあいつも気に入るよ」

そういつてわたしの頬をそおつと撫でた男の人は、声に似合う優しい面立ちに笑みを浮かべた。

「はじめまして。私はこの屋敷の主の蓮だ。キミは、今日から私の家で働くんだよ」

わたしは声を出せないなりに辺りを見回して女の人に助けを求めた。

「……この子？」

「声が出せないそうです。……なにか聞きたいことがあるの？」

うなずく。紙と筆があれば何とか通じるはず。そう思つてわたしはしゃがみこんで地面に文字を書いた。

「君、字をかけるんだね。なにになに？ なにをしたらいいかつて？

それを聞いて、いわれたことをこなすのが君の仕事だ。基本的なものがありかなどを覚えれば簡単な仕事だ。それに、ここの屋敷にある部屋を一つ貸そう。ぜひ、君には私の弟の世話をしてもらいたい」

弟？

そう書くと男の人、蓮さまはうなずいてわたしの頭をそつと撫でた。お父さんにされていたみたいで、とっても優しい気持ちになれる。

「ああ。ちよつと気難しいやつだけれども、根はすつごく優しいやつだ。うるさい侍女は嫌だといつていたから、君の声が出ないのはあいつにとっては良いのかも」

そういつてくすりと笑つた蓮さまにわたしはあいまいに微笑んで立ち上がった一礼した。

「よろしく」

わたしの意志をしつかり理解してくれていたらしい蓮さまにわたしはやつと心からの笑みを浮かべられた。

壺、（後書き）

ほとんど設定など練らずに、その場の勢いで書きました。
ので、なんか違う、どこか違うというのは御容赦ください。

壹、

そして蓮さまの案内で屋敷をざっとみた。温かくて、それでいて雨風のちゃんとしのげる家だった。

「そして、ここが君に頼みたい人の部屋だ。紅、入るぞ」

そういつて蓮さまは扉を開けて、自分が入ると、扉を押さえてわたしが入るのを待っていてくれた。

「なんですか？ 兄上」

部屋の奥から男の人の声が聞こえる。髪をまとめたまま、昼寝でもしていたのか。まとめきれずに顔を覆っている烏羽のような髪に寝癖のつけたその人は出てきた。鋭く整った顔立ちに喉をにじませて蓮さまをみて、わたしをみる。

「……この子は？」

「今日からおまえの世話をしてもらう子だ。えっと、名前は？」

わたしは首を振ってきょとんとした。侍女に名前などあるのだろうか。逆に聞きたい気分だった。

「……もしかして名前が？」

蓮さまの呆然とした声にわたしはこくりとうなずくと、蓮さまの弟君でいらっしやる、わたしと同じか、すこし上の年の男の人を見上げた。

「……焰」

「え？」

男の人は、そういつてわたしの髪に手を伸ばした。わたしの髪はどここの血を引いているのか、夕日色だった。

「おまえの名は、今日から焰だ」

吸い込まれるような黒い瞳にわたしは我知らずに目を奪われていて、そして、こくりとうなずいていた。

「声が出ないと？」

わたしはもう一度うなずく。男の人はすこし困ったように眉を寄

せて、蓮さまを呆れたような目でみた。

「もしかして、ボクが前の侍女がうるさいといったからですか？」

「いや、それもあるが、今日帰ってきたらちょうどこの子が来ていてね。年も近いから友達にも良いと思って」

「余計なおせっかいを」

「親切な親心さ」

きらんと玉が鳴る音がしそうなほど鮮やかに微笑んだ蓮さまに、男の人は深くため息をついて、わたしの肩に手を回して中に案内した。

「ということで、私はもう行くからな」

「はい。ご苦労様でした」

温かくて大きな手に肩をつかまれてわたしは無意識に男の人に寄り添っていた。

「……ということで、まず君は……。お湯殿で体を清めてきなさい」
「お……」

ゆどの？ と唇を動かす。そうすると男の人は目を瞬かせて額に手を当てた。

「体を清めるのに、川に行くだろう？」

こくりとうなずく。わたしは川で泳ぐのが大好きだ。

「そこまで行くのはここでは面倒だから、水を引いてあるんだ。その水をすこし温めて、ためてあるのだが……。そこですこし行水をしてきなさい」

噛み砕いた言葉でそういつてくれる彼の言葉にわたしはくんとうなずいて、案内されたお湯殿なる場所に入って、初めての温水を堪能した。

「心地よかったか？」

邪魔にならないように定期的に切っている髪を綿の布で包んで、今まで来ていた衣よりもずっと柔らかで温かい衣に身を包んだわたしは、彼の側によってうなずいていた。

「そうか。ならばよかった。……ボクの名は紅、という。覚えてい

てくれ」

そういつてはにかんだ彼にわたしはうなずいて一礼した。

「そんなにかしこまらなくて良い。……これからは楽にしていってくれ。すこし聞きたいことがあるのだが、いいか？」

首をかしげてみせると、紅さまはすこしいいにくそうにしながら口を開いた。

「声は、まったくでないのか？」

その言葉にわたしは首をかしげて肩をすくめた。正直、どこまで出るのかはわからなかった。今までそんなものが必要な職業ではなかったから。

「ボクの名をいつてごらん」

「……オン……あ……あ」

やっぱり出ない。音の残滓の音が出るだけで、まったく言葉ではなかった。のどに手を当てて目を伏せたわたしに、彼は目を細めて小さく笑った。

「大丈夫。これから出るようになる。完全に音が出てないようならばそうはいえないが、ちゃんと音は出てるから」

ゆっくり出せるように練習しなさいと優しくいった彼にわたしはこくんとうなずいていた。

これが、ご主人様の紅さまとの初めての日のことだった。

壹、

「焰」

「……あい」

一応口を動かしてそういう。言葉ではないがそれでも声を聞いてもらいたくてわたしはいう。

紅さまとわたしは不思議なほど合った。割れた石の破片がびたりとはまってもとの石を形付くるような不思議な感覚。

「これを兄上のところへ届けてくる。君はここで待っていてくれ」
うなずいて紅さまが出て行くのを見送る。

ここに連れてこられてもう数ヶ月が経つ。夏の一雨が待ち遠しい日差しが和らぎ厳しい冬の気配をにおわす秋がすぐそこまで来ていた。

ここの屋敷の人たちはみんな優しくかった。侍女以下の仕事をしてきたわたしに、根気よく仕事を教えてくれ、また、普通に話しかけてくれる。それは、侍女などの下働きだけではなく、紅さまをはじめ蓮さまや、蓮さまの奥方様もそういう方だった。

なんとなく、わたしの家を思い出した。わたしの家も、記憶が確かなら、ここまで大きくないものの侍女はいて、家事を手伝ってくれて、わたしの相手もしてくれていた。

「焰さん」

振り向くとすこし気位の高い侍女の一人がいた。正直、わたしはこの人が苦手だ。

「ああいうのは私たちが行くの。わたしがやりますといって、手の書状をとって蓮さまのところに行くのよ？」

すこしきつめの口調にうなずいて謝るように頭を下げる。

「本当に、声でないの？」

バカにするようなその声。わたしには慣れたその声音。わたしは頭を上げてうなずく。

「こんなに立派なのがあるのに、何故出ないのかしらね？」

ぬっと白い手が伸びて、わたしのどをつかもうとする。

「あっ！」

わたしはなにが起こったのかわからずにのどをつかまれていた。途端にこみ上げてくる嘔吐感。わたしは顔をゆがめて手をばたつかせていた。

「あ、……あ、い、で！」

あかんぼうがうにやうにやいつているような声でわたしは抵抗する。どうしても、のど元や、首を触られるのは嫌이었다。それは、父母を殺されたときにわたし自身ものどをつかまれ殺されそうになったからだろう。

「ほら、声出るんじゃない？」

わたしが本気で嫌がっているのをみて小気味よさそうに笑う彼女。そんな人だったのか。わたしがばたばたと手をさせているのにもかまわずに彼女はのどをつかむ指に力をこめて、本当にのどを握ってきた。

「ああああ！」

瞬間膨れ上がる恐怖。わたしはなににも考えられなくなって、こぶしを握って振り回していた。

「危ないじゃない？」

彼女はそういって、息が詰まらない程度に握ってくる。その時だった。

「なにをしている！」

鋭い声に、彼女はハツとした顔をしてぱっと離れた。わたしは、ただ狂乱の中にいてわからなかった。

「ああああ！」

暴れるわたしをみて紅さまは驚いた顔をしていたのだと思う。そして、わたしのど元についた赤い手跡に、紅さまは、あろうことかその侍女の頬を打った。

「貴様はなにをしている！」

怒鳴る紅さまに侍女は屈辱に顔を赤くさせて、声を震わせて申し訳ございません。からかいがすぎました。と白々しくいつてみせる。それでも、紅さまの気は治まらない。

「もうどこへ行くがよい。私はもう貴様の顔などみたくはない」
そういうと侍女を部屋から追い払い、泣き叫び壁にもたれてがたがたと体を震わせるわたしにそつと近づいてきた。

「大丈夫だ。焰」

「いや、いや」

その時は確かに言葉をしゃべれた。頭を両手で抱えて首を振っていた。紅さまは、わたしに目線を合わせるように床に膝をついてわたしの顔を、涙と鼻水でひどいことになっている顔を覗き込んだ。

「焰」

優しい声音。わたしはぼろぼろと涙を流しながら紅さまの優しい顔をみる。お兄様である蓮さまよりはするごく整つて、すこし近づくことをためらわれるような顔立ちは、時にびっくりするぐらい優しい表情をされる。

「もう、大丈夫だ」

そういつてわたしに両手を差し伸べてそつと抱きこんでくれる。近くにあるはずのぬくもりが遠くにあるような気がした。

わたしは彼の腕の中に長い時間いたんだと思う。そして、気がついたときには、紅さまが使われているふかふかの寝台の上で寝ていた。

「焰、いるか？」

蓮さまのすこし焦った声。わたしは慌てて体を起こして、着衣の乱れがないかを確認してから寝室から出た。

「ここにいたか。紅は、そこにいるか？」

わたしは首を横に振った。いつの間にか日が暮れていて、真つ暗な闇の中大粒の雨が降り出していた。

「くそ、あいつどこに家出した？」

めずらしく悪態をつく彼に首をかしげて机の上に書き置きがある

ことに気づいて目を通した。

「焰？」

「……わる、かった？ イエン、の、ふぼ、ころした、の、は、…
…わが、ちち？」

声が出ることに驚いたが、その内容にも驚いた。

「……父上が君の父母にも手をかけていたのか？」
「ちち、うえ」

まだ、かすれる声で首をかしげると、蓮さまは嫌な予感がするとい
って、詳しい話は紅が戻ったらするといって部屋を出て行っ
てしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8566y/>

わたしとボクのぬくもりの距離。

2011年11月27日19時56分発行